

連載　（供覧）いはひまつりのみち

宗教は人を殺し、祭祀は人を生かす
世界平和のための祭祀を復興させる

第十八回　嘘も方便

南出喜久治（令和7年5月15日記す）

ちちははと　とほつおやから　すみめおや　やほよろづへの　くにからのみち
(父母と遠つ祖先から皇御祖八百万神への国幹の道)

宗教は、嘘も方便といふ虚構の構造です。「嘘をつかねば仏になれぬ」とも言はれてゐます。極楽（天国）と地獄を作り出し、極楽の存在を説いて精神を癒して信心を得させ、その人の生活を安定させて希望を与へる同時に、不道徳や信心を捨てれば地獄に落ちることを説いて恐怖を与へます。希望と恐怖、極楽と地獄を並立させる信心と恐怖で作られた虚構によつて、著しく社会の混乱し困窮した時代にあつては、人を救ひました。末法思想が蔓延つた平安末期から鎌倉期などの時代です。まさに嘘も方便といふ効用があつたのです。

善行を行ふことによつて得る快感は、本能の所産ですが、これを信心の賜物と錯覚して帰依を強固にさせるのが宗教のからくりなのです。

いはゆる狂信的なカルトといふものがありますが、宗教は、少なからずカルトの要素があります。虚構により恐怖を与へて信心させることにおいては同じだからです。ただ、宗教の場合は、少なからず信心を得させるための教義を説いて信心させた後に恐怖を与へて、棄教させないやうにする点において比較的「良心的」ですが、カルトの場合は、いきなり初めから恐怖を与へて信心させる点に違ひがあるやうですが、これも紙一重の違ひに過ぎません。

キリスト教では、信者に信仰告白を書かせて自己暗示による洗脳を行ひ、これに離反しないやうにブラフをかけ続けます。

ですから、宗教は、虚構を説いて信心させて恐怖を説くことにおいてカルトと同じですから、広い意味で宗教はすべてカルトなのであり、目くそと鼻くそとの違ひです。

しかし、祭祀には、虚構がありません。

パスカルは、「パンセ」の中で、「人間はひとくきの葦にすぎない。自然のなかで最も弱いものである。だか、それは考へる葦である。」と語りました。

パスカルは、神が存在することを証明することを諦めました。それは、証明できないことを数学や論理学の天才であるパスカルとしては、循環論法となる矛盾に気づいてゐたからに他ならないのです。証明できないものだから宗教なのであるといふ開き直りです。

そして、神を信じるか信じないかのいづれが良いのか、いづれが人生において役に立つのか、といふ功利主義を持ち出して護教論を説きました。

神を信じて生きる方が、信じないで生きるよりも、人が生きることに必要な確固たる信念を持つことができるといふことです。

キリスト教では、信じない者は絶対に救はれないとします。そして、信じたとしても、絶対に救はれるとは限りません。信じたら救はれるかも知れないといふ予定説です。

だから、信じた方が救はれる可能性があるが、信じなければ救はれる可能性が絶対になないので、信じた方が得であるといふことです。

「信じる者は救はれるかもしれない」、「信じる者は騙されるかも知れない」、「信じない者は絶対救はれない」といふ状況であれば、信じた方が得だといふことです。

宝くじを買へば、高額賞金が当たる可能性があるが、買はなければ絶対にその可能性はありません。宗教を信じるいふことは、宝くじを買ふことと同じ理屈なのです。

「信じる者は救はれる」とは言へません。「信じる者は騙される」のかも知れないのです。だから、騙されても信じた方が得なのであるといふことなのです。

それが、人間が自然のなかで最も弱い「考へる葦」といふことなのです。

また、浄土門では、法然は称名念佛をすれば、あるいは親鸞は阿弥陀如来を信じれば、人は救はれるとしますが、阿弥陀信仰といふのは、本来において、阿弥陀如来を信じても信じなくても、阿弥陀如来の本願はすべての者を救ふとするのであれば、信じることを功利主義によつて勧めることはできなくなります。それでは、教団が組織として維持できなくなるので、信じないと往生できないと嘘についてまで脅して、信じろと迫つて寄進を求めます。さうしなければ教団として経済的に維持できないので、「嘘も方便」なのです。

この功利主義が信心の根底にあるのは極めて嘆かはしいことですが、これが宗教の正体なのです。祭祀とは全く異なる信仰の世界であることが明白になつたのです。